

□■支部報告■□

関東支部秋の見学会の記

恒例の関東支部秋の見学会は、昭和 61 年 11 月 7～8 日に行われた。関東支部の催しながら、今回は、東北は福島県まで足をのびしての見学会となった。7日の朝7時半に東京駅前に集合したのは、ほとんどがオジサン 32 名の中に、紅一点、若き女性の姿があり、いつもと違ってパツと明るい旅立ちとなった。

さて、バスは東北自動車道に乗り、まずは栃木県大田原市にある東芝那須工場を訪れた。ここは那須高原の清らかな空気と豊かな緑の中にある最新医療機器工場で、岡庭次長より説明を頂き工場見学に入った。X線、X線 CT、MRI、超音波、核医学などの画像診断機器や治療装置、システム等、最先端技術が「手づくり」で作られていることを知り、大変驚いた。これは、医師一人一人の希望を入れた「オーダーメイド」だからなのであり、一見ロボット的な冷たさを感じさせるこれら機器の中に、人間の生命を守る温かさを感じた。

ドライブインでの昼食のあと、いよいよ福島県に越境(?)し、福島東洋通信機に着いた。

大島常務から説明を頂き、高度情報化社会を支えるエレクトロニクスの核、人工水晶及び水晶部品の工場見学に入った。日頃小さなものしか見慣れていない我々にとって、大型のオートクレーブは驚きに値するものであった。人工水晶は、この中で

何か月もかかって成長し、引き上げられ、水晶振動子、発振器及び各種デバイスへと加工されるのであるが、これまた最先端技術でありながら「手づくり」であった。

「先端技術はまさに人間のこの手から生まれるのだな」と感心しながら5時半ごろ土湯温泉は「山水荘」に着いた。長旅の疲れを温泉のお湯で癒し、例によって例のごとく懇親会が始まった。「1分間自己 PR 合戦」で、和やかにして盛大な宴会となったが、もちろん今回は紅一点、いつになく盛り上がっていた。

翌朝7時45分、すばらしい虹をながめながらバスは会津碓子へと向かった。いつも見学会で御一緒の久部氏の案内で会津工場に到着し、大坂常務らのお出迎えを受けた。ここは文字どおり碓子を製造しており、天然原料から出発してかなりの長い工程を経る。品質管理はもとより、各工程では自動化の努力をされており、過酷な条件に耐えなければならない碓子は、ここでは「手づくり」からの脱皮を目指しているように感じられた。

いわゆる「工場見学」はこれにて着落し、いよいよ本命(?)の見学へとバスは走り、本郷焼の本郷町に着いた。宗像窯では、ガス炉では到底作り出すことのできない「登り窯」を今でも守り続ける宗像亮一氏の執念を見、本郷焼資料館では、我が窯業協会会員でもあられる鈴木館長の御案内を受けた。そして昼食は二丸屋武蔵亭。窯業協会会席料理(ボウタラ、山桃の種、マタタビ、山椒、etc.)に舌つづみを打った。会津酒造博物館、そして漆器工房「鈴武」をもって2日間にわたる極めて中味の濃い見学会を終え、一路東京へ、とバスはひた走った。

大変すばらしい企画と、準備、運営に御苦労なされた関東支部役員の皆様様に感謝しながら川口駅前で散会した。

(日本化学産業(株)大條一夫)

